



Une vie

(2016, France=Belge, 119 min., couleurs)

監督：ステファン・ブリゼ／原作：ギイ・ド・モーパッサン／脚本：ステファン・ブリゼ、フロランス・ヴィニョン／撮影：アントワーヌ・エベルレ／音楽：オリヴィエ・ポーモン／美術：ヴァレリー・サラジャン

出演：ジュディット・シュムラ（ジャンヌ）、ジャン＝ピエール・ダルッサン（ジャンヌの父）、ヨランド・モロー（ジャンヌの母）、スワン・アルロー（ジュリアン）

配給：ドマ、ミモザフィルムズ

イントロダクション～ストーリー：

ギイ・ド・モーパッサンの『女の一生』は、これまで幾度となく映画化されてきた。そのなかで日本の観客にもっともよく知られてきたのは、日本で翻案・映画化されたものだったかもしれない――。

なに不自由なく生まれ育った女性が、理想的な若者と恋に落ち、結婚する。幸せにあふれているかのように見えた結婚生活は、しかし、次々と裏切られてゆく。夫の不貞、息子の放蕩、そして没落……。その困難を生き抜いたひとりの女性の生涯。

19世紀後半、フランス社会の在りようを、ひとりの女性の生き方から見つめた小説が、どのように20世紀において受け止められてきたのか。そしてそれが21世紀において、どのように変わらなければならなかったのか？ ステファン・ブリゼの『女の一生』は、その軌跡を、あるいはひとつの小説がどのように読まれ「見られる」必要があるのかを明らかにしているように思える。

『女の一生』について：

モーパッサンの『女の一生』（1883）は、自然主義文学を代表する作品のひとつであり、モーパッサンにとって処女長編小説でもある。初出は日刊紙「Gil Blas」で、同じ年に1冊の書籍にまとめられた。「la vie «d'une femme, depuis l'heure où s'éveille son cœur jusqu'à sa mort.»（「ひとりの女性の目覚めのときから死まで」の人生）を描く作品として企図された（実際に描かれているのは半生であるが）。

自然主義文学は、写実主義（リアリズム）を土台としながら、人間観察と科学的知見を小説に導入したが、絵画における印象派との関係が深く、フランス映画の歴史は、この両者から大きな影響を受けていることが知られている。

『女の一生』の主人公ジャンヌはノルマンディ地方の裕福な男爵家に生まれる。17歳のときに修道院から家に戻って来たところから物語は始まる。使用人のロザリ以外に友人もなく、文字どおりの箱入り娘として育てられた彼女は、両親が決めた子爵家の青年ジュリアンと、言われるままに結婚する。幸福そうに見えた結婚生活はしかし、ロザリが妊娠したことから崩れてゆく。さらに夫ジュリアンの友人フルシュヴィル伯爵との交際は、夫の目に余る不貞を招き、ジュリアンはその死をもって償わされることになる。残されたジャンヌは、ひとり息子ポールを溺愛するように育てるのだが、ポールもまた放蕩の挙げ句に……と、艱難辛苦の半生が綴られてゆく。

日本での『女の一生』：

ひとりの女性の困難な半生を描く物語は、フランス以上に日本で受容されてきた。

1928年以降、さまざまな映画化が存在し、よく知られているところでは、新藤兼人監督（1953／乙羽信子主演）、野村芳太郎監督（1967／岩下志麻主演）のほか、明らかにモーパッサンの『女の一生』を下敷きにした翻案作品も数多く、さらに舞台化も盛んに行われており、その数は本国フランスをしのぐ。

映画においては、とくに1950年代、溝口健二監督＝田中絹代主演のコンビによる女性映画が日本映画界を席卷するとともに、確固としたジャンルを形成していったことも影響していると考えられるが、なによりさまざまな逆境を耐えて生きるひとりの女性の姿に、日本社会における女性の姿が重ね合わされ、それが多くの共感と感動を呼んできたことは、想像に難くない。



フランスでの『女の一生』:

一方で、フランスでの映画化は、1958年、アレクサンドル・アストリュックによるものが最初となっている。

マリア・シェルのジャンヌ、フルシュヴィル伯爵夫人をイタリアのアントネッラ・ルアルディ、そしてジュリアン役にクリスチャン・マルカンという配役で、シェルの清楚な美しさが際立つ作品。冒頭、陰鬱な屋敷を写し出した映像から一転、海に向かって駆け出すジャンヌとロザリをとらえたショットは、晴れやかな色彩に満ちあふれており、またジャン・ルノワールの『ピクニック』(1936-46)を思わせる映像など、沈鬱な屋内と晴れやかな屋外という対比に、そしてジャンヌのモノローグによる物語進行に、ヌーヴェル・ヴァーグの到来を感じさせる作品となっている(アストリュックは、ヌーヴェル・ヴァーグを先導したシネアストとしてつとに知られる)。

その後、2004年にテレビ用作品がつくられているが、映画化は2016年のステファン・ブリゼ監督まで待たなければならない。

アストリュック版『女の一生』評(ジャン＝リュック・ゴダール):

「『女の一生』は驚くほど見事に構築された映画である。(……)彼(アストリュック)は反対に、シナリオが必要としている地域の全域、それよりも広くも狭くもない全域において自分の映画を考えたいという印象を与えている。(……)困難なのは林を見せるということではなく、ある居間を、その目と鼻の先にある林があることが分かるように見せるということである。(……)目では見ることでできないその広大な空間のなかに、アストリュックはドラマを形づくるための視覚的な座標を設定している。『女の一生』の



すべてが、この基本原則(横座標と縦座標)にもとづいて組み立てられているのである。水平の運動は、砂浜をめざして駆けるマリア・シェル(ジャンヌ)とパスカール・プティの動きである。垂直の運動は、港の埠頭でパートナーとなるはずの女を助けあげようとして身をかがめるマルカン(ジュリアン)の動きである。(……)アストリュックにとって『女の一生』を演出するという事は、(……)その場面なりカットなりに独自のドラマ上の統一性をもたせながら、水平ないしは垂直のこの二つの運動のひとつを際立たせることだった」(「別のところに」『ゴダール全評論・全発言I』筑摩書房)

ステファン・ブリゼ監督について:

1966年、レンヌ生まれ。映画についての専門教育は受けておらず、レンヌ大学では電気関係のエンジニアリングを学ぶ。その後、地元レンヌ、さらにパリに出てテレビ局で技術職に就く。そのなかで演出に興味をもち、舞台の演出や短編映画制作を開始。1999年、処女長編“Le Bleu des villes”を撮り、カンヌ映画祭の監督週間にて上映。2005年、『愛されるために、ここにいる』で一躍注目を集める。2009年『シャンボンの背中』、2012年『母の身終い』、そして2015年『ティエリー・トグルドーの憂鬱』と、いずれも、ある(厳しい)現実のなかに置かれた人々の細やかな心理を俎上に載せた作品で注目を集め続けている。『女の一生』は、2016年のルイ・デリュック賞を受賞。

ステファン・ブリゼ監督『女の一生』について語る:

「19世紀を生きたブルジョワの娘ジャンヌは、時代も立場も違いますが、私が完全に感情移入できる人物でした。(……)ジャンヌは理想化された美しい人生に留まろうとし、ある意味で子供時代を葬り去ることができません。かつて自分も世界に対する理想の中に閉じこもっていた時期が長くあったのでよくわかるのです。(……)」

ひとつ言えるのは、これは19世紀という時代についての作品ではないということです。女性の条件についての物語でもありません。これはある幻想と、幻想の終わりを描いています。それは今、私たちが生きる世界と根底で繋がっているのではないのでしょうか。今、私たちは集団的な無意識において、幻想の終わりの時代を生きています。アメリカでは、理想を追い求めたオバマの時代は終わり、トランプ大統領が誕生しました。ヨーロッパも一枚岩ではありません。ある壮大な幻想が終わり、緊張と狂気の世界に入ったのです。」(林瑞絵「映画『女の一生』、ステファヌ・ブリゼ監督に聞く」論座/<https://webronza.asahi.com/culture/articles/2018011000004.html>)

